

図書館通信 —53—

1980. 10

学術情報システムと静岡大学

—第27回国立大学図書館協議会総会の報告をかねて(昭和55年6月)—

近藤 禧 禎 男

I. 昭和55年1月に学術審議会より答申された「今後における学術情報システムの在り方について」(以下「答申」という)はすでに充分承知され、また理解されていると思いますが、具体策として全国的にどのようなことが行われているか、また行われようとしているか、を簡単に説明し、静岡大学での現状とこの「答申」との関係を考えてみたい。「答申」が出されて最初の国立大学図書館協議会総会は、本年6月に東北大学で開催されたが、ここで協議は「答申」をふまえて全国、地域、各大学それぞれのレベルでの対応の仕方といった議題が中心になっている。大学図書館は「答申」によって具体的に動きだしている。

II. ここでは「答申」についてくわしい説明は省略するが、その骨子は次のようなことである。まず、学術情報システムを機能面から確立するために一次情報の収集・提供機能の充実、情報検索システムの確立、データベース形成の促進であり、これらの機能を全国的ネットワークによって構成していくために大学図書館その他研究機関の図書館、大型計算機センター、国立大学共同利用の研究機関が一体となってコンピューター・ネットワークを組み、さらにこれらを調整する「中枢センター」を設置する。そして、このネットワークを円滑に運用し発展させるための人材の養成を行う。

以上、「答申」の骨子は述べたが、ここで特に注目しておきたいのは、大学図書館が学術情報システムの中で重要な機関として位置づけられていることである。そこで、「答申」の中の大学図書館の役割をもう少し細かく説明しておきたい。まず第一に、分野別拠点図書館の構想であり、すでに自然科学系外国雑誌について全国の大学図書館の中からいくつか拠点図書館を選び一次情報の収集・

提供が行われている。第二に、各大学図書館では、①情報検索の窓口あるいはターミナル機能 ②一次情報の収集・提供機能 ③所在情報の形成と検索機能(図書・雑誌の目録情報のデータベースとその所在の情報のデータベースを検索、利用すること)によって利用者である研究者にサービスを行うこととしている。大学図書館と総称される中で附属図書館は従来学習図書館としての機能を備えるものとして見られ、研究図書館の機能は重視されなかったが、「答申」では附属図書館を含む大学図書館を研究図書館としての機能をもつものとして位置づけ、学術情報システムの中で研究者へのサービスの窓口であるとしている(このことは学習図書館の機能を軽視したり、蔑にすることではない)。

III. 文部省は数年来大学図書館の全国的ネットワーク実現のための施策を実施してきているが、「答申」へ対応するものとして次のようなことが推進されている。①昭和52年度より自然科学系外国雑誌購入費を予算化し、医学・生物学系、理工学系、農学系の3分野の国立大学の拠点図書館に外国雑誌を集中購入し、一方全国の国立大学にも雑誌を集中化し共同利用を促進するための購入費が配分されている。各拠点図書館では指定された専門分野で必要とする我が国未所蔵の外国雑誌を収集

もくじ

学術情報システムと静岡大学	1
私のすすめたい本「芸術と幻影」	3
漢籍目録雑感	4
最近の受贈図書から 書誌・目録・索引類	5
図書館委員会報告	6
浜松分館だより	6
人事異動	6

し、理工系を除いてあと1、2年で収集が完了するといわれている。これらの拠点図書館では全国から主に文献複写による利用申込みを受付け、将来は必要とする外国雑誌の文献は誰でもほとんど完全に入手出来るようになる。また、これらの文献情報は「答申」にいう「中枢センター」を中心とする通信網によって検索したり、ファクシミリによる情報入手も可能になる。②自然科学系外国雑誌に対して、人文・社会科学分野には大型コレクション購入費が計上され、全国レベル、地域レベルで共同利用をすることを目的とし、高額でまとまった資料が国立大学の附属図書館に配置されている。これは、各大学独自では購入することが困難な高額な図書やコレクションを措置することによって人文・社会科学分野の研究資料を充実し、全国の誰でもその資料を利用出来るようにしたものである。③情報検索では国際的な二次情報データベースをオンラインで検索できるよう開発が進められ、東京大学大型計算機センターではTOOL-IR (Tokyo University On-Line Information Retrieval) と呼ぶシステムによって全国の大学の大型計算機センター、或は計算機センターを通じて研究者に情報検索サービスを実施しようとしており、一部では現実に実施されている。また、筑波大学、広島大学、その他いくつかの大型計算機センターや国立大学共同利用機関でも各種のデータベースの利用システムの開発や実験を行っている。さらに、大学図書館のコンピューターの地域共同利用システムの開発に着手している。これらはいずれも全国的ネットワークによって利用可能になる。④所在情報の検索システムの研究・開発は LC-MARC (アメリカで出版されている図書の書誌情報データベース) を中心に各国の書誌情報データベース、日本では JAPAN-MARC (国立国会図書館で開発されている日本の図書の書誌情報データベース) も進められている。また、「学術雑誌総合目録」もデータベース化されているのでこれらの所在情報の検索は近い将来全国的通信網によって実現する。⑤学術情報システムの中で各機能を円滑に運営するための「中枢センター」は調査費が計上され、学術情報システムの中核機関の設置に着手した。この「中枢センター」は連絡調整、計画、データベース・サービス、研究開発、教育訓練などの機能を持ち、学術情報システムを構成する各機関とつながっている。⑥国立大学間における文献複写業務の整備・充実、大学間(国立・公立・私立)の協力体制の充実、人材の養成なども「答申」との関係からさらに促進

されよう。以上のような施策はよりトータルなものとして構成され、「答申」の実現に向うであろう。

Ⅳ. このように学術情報システムについて文部省の施策や全国的な開発・実験が先行するなかで、各大学図書館はその対応策を検討し、整備に着手しつつあるのが現状である。本年の国立大学図書館協議会総会の研究集会のテーマは「全国的規模で展開する学術情報システムに、各大学内の図書館体制を如何に整合し、協力させ得るか」であり、次の事例報告がなされた。①学術雑誌の学内集中管理(岡山大学) ②外国雑誌拠点図書館の運営(大阪大学) ③コンピューターの地域共同利用(九州大学) ④図書館新営計画と学術情報システム(長岡技術科学大学)。これらの報告では、各大学図書館が個々の大学という枠をこえて学術情報システムのなかに位置づけるといふ共通した姿勢があった。また、国立大学図書館協議会は各大学図書館が「答申」に対応していくうえでの財政的、人的措置を文部省に要望していくと共に、昭和50年同協議会のもとに発足した図書館相互協力調査研究班の研究成果を「国立大学間における図書館相互利用制度の整備について」として総会に報告し、これを受けて同協議会では全国的な相互利用の合理化、システム化に進もうとしている。文献複写による相互協力の整備が進む一方で、大型コレクションが全国の国立大学図書館に配置され、これらの資料を閲覧したい研究者も多い。そこで、全国の大学図書館に通用する「共通閲覧証」によって研究者の図書館利用の便を計ろうとするのが上記の報告のポイントである。自然科学系外国雑誌の分野別拠点図書館についてはすでに述べたが、いわゆる第一種(各大学に配分される自然科学系外国雑誌購入費)の運用についても学内での雑誌を集中し共同利用することを前提としたものであり、各大学でもその方向で対応している。しかし、各大学ではそれぞれの学内事情や研究体制との関係から集中化が進んでいるところとそうでないところがある。ただ、自然科学系外国雑誌購入費の配分を機会に外国雑誌の配置について全学的に検討する機会が生まれたことは確かである。「答申」はさらにこれを進展させることになる。全国の大学図書館が所属大学の枠をこえてネットワークを組んでいくということは、とりもなおさず各大学においても学部、研究室等の枠をこえた資料の共同利用体制が整備されなければならないことを意味している。

Ⅴ. 最後に、この答申と静岡大学の関係について考えてみたい。静岡大学は大谷地区への統合移

転に際して図書については附属図書館で集中管理をする方式を採用し、図書の発注、受入、整理、保管は附属図書館において行っている。これは今後の学術情報システムに対応するうえで先見の明があったといつてよい。元館長石塚先生は集中管理方式の採用の経緯を「少ない研究費を合理的に使用するために多くの人々が共通に利用する図書を図書館に集中管理して無駄をなくすること」(図書館通信19号)がその目的とするところであると説明されているが、現状では近先生が述べられているように「いつのまにかこのルールが崩れてしまい無原則的な研究室持込みが増え……集中管理図書の基準をもう一度はっきりさせてはどうだろうか」(図書館通信17号)という意見と八木先生の「教室の研究費で購入した雑誌や専門書は手許においておきたいという気持ちになるのも無理からぬこと」(図書館通信18号)という意見があり、集中化、共同利用と研究体制という今日的な図書館基本問題を「答申」との関係でどのように考えるか重要な検討事項である。次に、自然科学系外国雑誌の集中化、共同利用も昭和53年度には本館で10タイトルであったが、現在149タイトルの集中化が行われている。これは、理学部、教育学部、教養部で購入していた数学関係外国雑誌をすべて本館に集中し、重複を除いて共同利用しようとするものである。研究費を有効に使い、できる限り重複をさげ、さらに研究資料を充実していくことは、集中化、共同利用の大きな利点として認められているところであり、静岡大学での数学関係外国雑誌の集中化は今後の本学の学術雑誌を中心とする学術情報の組織化を考えるうえで重要な意味をもっている。また、これを契機に図書館委員会のもとに外国雑誌小委員会を設け、自然科学系外国雑誌の集中化についての問題点や方法を検討している。複数部局に分散した専門分野の外国雑誌を集中化し、重複をさけて共同利用することは「答申」にも示されているところであるが、これも研究体制との複雑で困難な問題があり、集中化によっておこる資料の設置場所の変更から研究上の障害を少なくしていくために図書館サービスの面で何をなすべきか考えていかなければならない。「答申」に示されている各大学等の図書館の機能は、①情報検索の窓口およびターミナル機能 ②一次情報の収集・提供機能 ③所在情報の形成と検索機能であるが、静岡大学では②はすでに述べたように不十分ではあるが、一定の方向が出されている。①と③はまだ検討の段階でその方針を模索しているのが現状である。静岡大学は東海地区

に属し、名古屋を中心に大学図書館の組織活動を行っているが、一方、東京にも近いという地理的条件の中で、附属図書館の規模や諸条件の整備状況を勘案すれば、これらの地域とネットワークを組める学内体制を進めていく必要がある。附属図書館においては情報検索や所在情報の検索の研修および要員の養成をする時期に来ているのではないであろうか。「答申」にもとづいて進められる全国的動きを見ながら(或いは予見しながら)その時々に対応出来る方策なり、準備を進めていくことが静岡大学附属図書館の今後の課題であろう。「答申」にそって全国的規模で展開しようとしている学術情報システム、大学図書館のネットワーク化に積極的にとりくむことによって静岡大学が受ける恩恵は大きい。文献複写や相互利用についてもさらに充実するであろう。大学図書館は学術情報や資料を必要とする者にいかに速く正確に提供出来るか追求しなければならない。学術情報や資料の所在がコンピューター・ネットワークにより検索され、これらの情報にもとづいて共同利用というシステムによって資料を利用する時代はもう遠くない。「図書館通信」5号に松岡先生が「真夏の夜の夢」と題して描かれた大学図書館の姿は夢でなく現実となりつつある。

(附属図書館・閲覧課長)

——私のすすめたい本・38——

「芸術と幻影」E. H. ゴンブリッチ著

瀬戸慶久訳 岩崎美術社 1979
(E. H. Gombrich, *Art and Illusion, London, 1960)

岡本重温

著者については我が国でもよく知られているが、1909年ウィーンに生まれ、ウィーン大学で美術史等を学び、1939年以降イギリスに移り、ロンドン大学その他で活躍して今日に至っている。本書のほかに「*美術の歩み」(The Story of Art 1950)「規範と形式」(Norm and Form)「理想と偶像」(Ideals and Idols 1979)をはじめ多くの著書や論文がある。本書は「美術家が見ているものを描く」ことはできず、イメージによって「意味を追い求める努力」をするものだと主張を立証するため、知覚や錯視の問題を掘り下げつつ、様式の謎、再現模写、創造の機能と形式、観照者の役割、発見、カリカチュア、表現などの問題について自説を展開する。1957年に行った The Visible World and the Language of Art と題する一連の

講演原稿を加筆したものである。

数年前、私は本書の原典を演習の授業でテキストに使った。決して読み易いとはいえないが、論旨は説得力十分で該博な知識や事例に裏づけられて重みがあり、量的には多すぎて無理な点もあったが、講読には良い教材であった。したがって出来るだけ多くの学生諸君にも読んでもらいたいと思っていたが、昨年末にようやく翻訳が出た。600頁あまりの分厚い本となり、値段も張ることになったし、訳者瀬戸慶久氏の絶筆となったし、気楽におすすめにいくいが、訳文も立派であり、やはり推せんしたい気持ちにかられる。

また、本書は芸術の心理学的研究として、美術史学との結びつけ方も絶妙といえよう。彼は、「見ること」・「知ること」との関連を重視し、視知覚を通じて表現された芸術独自の世界を通じて、それを創り出した人間性を探究しようとするのである。「美術の言語の真の妙味は、美術家に現実のイリュージョンを創造させることではなく、それが巨匠の手で扱われると、イメージが半透明になってしまうということだ。見える世界を新たな目で見直すことを教えながら、巨匠は心が見えない領域をのぞき込むようなイリュージョンを示してくれるのである。」と美術の暗号的性格を述べているところにその趣意がうかがえる。同じく心理学的傾向をもつハーバート・リードが専ら芸術に秘められた深層心理や意識の問題を文学的材料も駆使して解明しようとしたのに比べると、彼の方は心理学を武器としながらも、やはり美術史家らしく様式の問題に重点をおいているといえよう。

ついでながら、芸術と心理学に関しては、彼やH. リードのほか、ゲシュタルト心理学的傾向のルドルフ・アルンハイムの「*美術と視覚」(Art and Visual Perception) 「*視覚的思考」(Visual Thinking) なども推せんしに値することを付言しておきたい。(教育学部・美術) (*印は本館所蔵)

右下より→*

相互に整理上の参考、所蔵検索及び新資料の発見等にも役立てられるので、その成果は大きい。

シルクロードの果ての島国日本に、伝え残された漢籍の宝庫は、外国からの利用者も多いという。漢字圏に在る者として、活用されるために払う努力を忘れてはならないと思う。なお、中国における書目の分類の変遷について、若干ふれたかったが紙面の都合で省略した。

(附属図書館・受入係長)

漢籍目録雑感

一 昭和55年度漢籍担当者講習会に参加して一

吉田玲子

この図書館にも約500種、13,000冊の漢籍が所蔵されているが、それらは、和書と共に、NDC(日本十進分類法)によって分類し、配架されている。閲覧用カード目録は、著者・書名・分類の別に編成されているが、冊子目録はない。特殊コレクション等を持っている館は別として、ごく一般的に取り扱いであろうと思う。

然し、これでよいと考えているわけではない。現状維持を続けている理由を強いてあげれば、漢籍ないし、漢籍目録に対する専門知識の不足が、検討を逡巡させているのかもしれない。館員にとって漢籍が、欧文書よりも遙かに遠い存在に思えることだけは確かである。

この辺の事情については、偶々、内藤湖南先生の「敬首和尚の典籍概見」という一文の中に、次のような記事が載っていて興味深い。「目録学は支那に在りて、特別の発達を為し、二千年前に於て劉向、劉歆父子を生じ、其後之を祖述したる者は間出すれども、要するに二劉の上に出づる者なし。其の精神は著述の流別を明らかにするに在りて、単に簿録部居を為すに在らず。是れ支那の如く、あらゆる学問を歴史的に考察する特殊の傾向ある国に相応して成立すべき者にして、専ら分類的に整理せんとする取扱いの下に成立すべき者にあらず。故に支那に於て有益なる目録を編製せる学者にても、目録学の本旨に合せる者は至て尠しとせらる。我邦にて此学を為せる人の皆て之なかりしは異しむに足らず。現今の如く大小の図書館、到る処に設立せられて、図書館学が優に一科の学を成せる時に於てすらも、此の支那の古き、発達せる目録学に無関心なることを免がれざるは、是非もなき事と謂ふべし」簡潔で要を得た説明は支那目録学が立ちはだかっているような感があって近付き難い。

幸いにも、今年5月に、京大人文学研究所附属東洋学文献センターで開催された、漢籍講習会に参加することができたが、中国の書物、参考図書、書誌解題、整理法、四部分類等について、講義と実習が非常に効率よく行われたので、漢籍目録入門の目的はひとまずかなえられた。

講習会で習得したものを拠り所として、僅かずつでも実践が伴えば、目録の標準化が進む中で、

*←左下へつづく

——最近の受贈図書から——

書誌・目録・索引類

このリストは、最近（概ね一年）の受贈図書から、書誌・目録・索引類を、所蔵又は発行機関名のABC順に配列したものです。機関名、書名、刊年、頁数、請求記号の順に記載し、書名は「」で示し、書名に機関名が示されている場合は機関名を省略しました。なお、※印の付いたものは未整理のものです。末尾に若干の注を付けました。

愛知県勤労会館労働図書室「労働関係文献索引1979年版」1979. (366.03—A 23) 同図書室が1年内に受け入れた資料から、雑誌記事とパンフレットを分類順に配列。巻末索引あり。

「防災専門図書館所蔵公害関係図書総合書名索引」昭54. 203 p. (519.5—Z 3) 以前に刊行した公害関係図書目録11冊の書名索引。

「防災専門図書館所蔵戦災関係図書目録」昭54. 79 p. A 4 (369.37—Z 3) 戦災関係の資料839冊を分類順に収録。全国各地の体験記録と広島・長崎の原爆に関する資料が中心。広島大学附属図書館「森戸文庫 続」昭54. 65 p. (※) 森戸辰男氏旧蔵の図書・パンフレットを正編に続き収録、社会主義運動・社会問題などが中心。

「鹿児島県立図書館所蔵大久保利通関係文献目録」1978. 39 p. (289.1—0 54 k) 大久保利通関係文献202点を収録する小冊子。

慶応義塾大学附属研究所 斯道文庫「コルディエ文庫 分類目録」1979. 147p. (029.9—Sh26) フランスの東洋学者・書誌学者アンリ・コルディエの旧蔵本。永青文庫よりの寄託資料。

北九州市立図書館「北九州市立各図書館所蔵英米文学作家研究邦文文献目録 昭20—53年末」1979. 73 p. (930.2—Ki65)

工業技術院地質調査所「地質文献目録 1956—60(地域別)」1978. 301p. (450.3—Ko26) 地質学関係の雑誌論文を地域別に5年間収録。

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録 1979」1980. 1314p. (※)

国立国会図書館「現代政治史資料目録1 佐藤達夫関係文書目録」1979. 147 p. (310.3—Ko49)

京都大学経済学部「上野文庫目録・一般の部2の1, 2 新聞部門(3) 1960—1970」3冊(029.

9—Ky6)前朝日新聞社社長上野精一氏寄贈資料。これ以前に新聞部門について解題目録有。京都外国語大学図書館「フリードリヒ・フォン・シラー・作品と参考文献」昭54. 152 p. (940.28—Sc3) シラーに関する図書及び雑誌論文892点を収録。

名古屋市蓬左文庫「尾崎久弥コレクション目録第三集」昭55. 135, 40 p. (029.8—H 91—3) 江戸文学に関する版本を中心に。3集は2集に続き複製本・パンフレットなどを収録。

日本貿易振興会経済情報センター「海外統計資料目録」昭51. 2冊(350.3—N 77) 海外の統計資料約3,500を、国別—主題別、主題別—国別の各1冊に配列しその所蔵を示したもの。日本学術会議「文科系文献目録 XXIV、体育学下の1」1978. 117p. (028—N 77—24(2) 1) 1925—1977までに発表された身体活動に関する研究論文を分類別に収録。

日本証券経済研究所「高橋亀吉文庫目録」昭53. 363p. (330.3—N 77) 高橋亀吉博士旧蔵書13,500冊の分類目録。

日本女子大学図書館「成瀬文庫目録」1979. 176 p. (※) 日本女子大学創立者成瀬仁蔵氏旧蔵書の洋書1919タイトルを収録。女子教育を中心とした各分野。

大阪外国語大学「石浜文庫目録」昭54. 907 p. (029.9—0 73) 石浜純太郎博士旧蔵書、東洋学関係、和漢洋書、雑誌およそ4万冊

「大阪市立大学図書館所蔵新村文庫目録」1978. 380p. (029.9—0 73) 新村出博士旧蔵書7, 579冊を収む。言語学・国語・国文学を中心。

最高裁判所図書館「邦文法律雑誌記事索引 22(昭和53年版)」1979. 571p. (雑誌扱) 昭和53年中に刊行された(同館受入)邦文雑誌掲載の法律関係の論文・記事を分類順に配列。

信託協会「本邦信託文献総目録 戦前の部」麻島昭一編 昭39. 435p. (338.8—A 83)

明治期より昭20. 8. 15までに刊行された信託関係の単行本、雑誌論文、パンフレットを時系別・事項別・会社別・執筆者別に配列したもの。別に戦後の部もあり。

「東北大学附属図書館所蔵西藏大蔵経マイクロフィルム索引」昭53. 112 p. (183—To25)

同館所蔵のデルゲ版西藏大蔵経を保存利用のためマイクロフィルム化した、その索引。

東京大学法学部「明治新聞雑誌文庫所蔵 雑誌目録」昭54. 340 p. (027—To46) 先に刊行された同文庫「新聞目録」と対をなす所蔵目

録。都道府県別索引、難読誌名一覧などがつく。

『東京都立中央図書館蔵団体史目録』 昭53. 325 p. (060.3-To46) 昭和53年3月現在の和漢欧文の各種団体資料とその参考資料。4156 タイトルを収録。

『東京都立中央図書館蔵住民運動に関する文献目録』1980. 258 p. (※) 明治以降の住民運動に関する図書、図書の一部に含まれるもの、雑誌論文(1970以降)を収録。

■浜松分館だより

浜松分館受贈図書・雑誌より

(昭和55年4月～8月)

『ライフ・サイエンスの進歩』 日本医師会編

『強風の性質』 塩谷正雄著

『近畿大学工学部20年史』

『歯科機のヨンダ72年のあゆみ』 吉田製作所編

『旭硝子工業技術奨励会研究報告』

『電気通信自主技術開発史 線路編』

日本電信電話公社編

『金型加工基準(Ⅲ) プラスチック ダイカスト

鍛造型編』 自転車産業振興協会編

『動燃十年史』 動力炉核燃料開発事業団編

『50年のあゆみ』 日本信号(株)編

『我が国工学百年の歩みと展望』 日本工学会編

『日立プラント建設株式会社史』

『日本の塩化ビニール産業』

日本ビニール商業連合会編

『続 絹糸の構造』 北條舒正編

『研究開発7年史』 医療技術研究開発団編

『計量百年史』 日本計量協会編

『演算子法と過渡現象』 林 重憲著

『計測用特殊撮像管の開発に関する研究』

鈴木義二著

『フォットグラフィック

X線とソフラック写真』 小泉菊太著

『三洋電機30年の歩み』

『浜松の史跡 続編』 浜松史跡調査顕彰会編

『人を活かす経営』 松下幸之助著

『荒れる法廷 司法の権威と人権 (上)(下)』

ノーマン・ドーセン他著

『建設業はいま』 日刊建設通新編

『Metallurgical Abstracts on Light Metals and Alloys.』 軽金属奨学会編

I.E.E.E. Transactions on Aerospace and Electronic System.

———— Broadcasting.

———— Cable Television.

———— Circuits and Systems Magazine.

———— Consumer Electronics.

———— Communications Magazine.

———— Electron Devices Letters.

———— Engineering Management.

———— Engineering Management

Review.

———— Geoscience and Remote Sensing.

———— Professional Communication.

———— Pattern Analysis and Machine

Intelligence.

———— Sonics and Ultrasonics.

———— Veficular Technology.

Computer Machine Perception.

I.E.E.E. Journal of Oceanic Engineering.

『藤枝市の文化財』 藤枝市教育委員会編

『道路交通解析のための統計学』

全日本交通安全協会編

■図書館委員会報告

○昭和55年度 第3回 S.55.6.16

議事 1. 図書館経費について

委員会における各部署の意見を館長が附帯事項としてまとめ各委員に送付することにして原案を了承した。なお二部局は教授会等でさらに検討する必要がある、その了承が得られれば予算配分委員会に提出することとした。

2. その他

(1)館長から、別紙昭和54年度国立大学大型コレクション購入一覧のとおり整備された旨の報告があった。

○昭和55年度 第4回 S.55.7.14

議事 1. 図書館の基本問題について

館長から、附帯事項について説明があった後、この取扱を含めた図書館予算の今後のあり方について、意見交換を行ったが、継続審議することとした。

■人事異動(浜松分館)

退任(55.4.30付) 井本文夫 館長

新任(55.5.1付) 大月卓郎 館長

辞職(55.4.1付) 高山弘一郎 係長

昇任(55.4.1付) 森 生也

名古屋大学附属図書館→係長

辞職(55.5.10付) 丸山紀久子(但し引続き別途採用)

採用(55.5.12付) 小岱 正